
DOGS vs CATS

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOGSVSCATS

【Nコード】

N7950G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

街の不良同士の喧嘩。けれどそこには確かなロマンがあった。その中にいる不良達にもまた。チェッカーズシリーズ第四十弾です。高空さんがヴォーカルでした。

第一章

DOGS VS CATS

「今夜だな」

「ああ、今夜だ」

俺は情報屋から話を聞いていた。聞いているのはいつものバーだ。そこでサングラスに黒いコートに如何にもといったそいつから話を聞いていた。

薄暗い酒場でバーボンをやりながら聞いている。今は夕方、今夜だとすると丁度よかった。

「今夜だつて行って来た。向こうからな」

「で、タイムマンかよ」

俺は情報屋からこのことを確認した。

「向こうから行って来たんだよな」

「信じられるか？」

「いや、全然」

首を横に振って情報屋に答えた。

「あいつの言うことが信じられるかよ」

「今までが今までだしな」

情報屋もそれはわかっていた。向こうのチームのあいつときたらどんなに汚いことも平気な糞野郎だ。このことはこのストリートじや誰も知っていることだった。

「何かあるに決まってるぜ」

「何だと思ってる？」

「どうせあれだろ」

俺は啞え煙草を取り出した。それに火を点けてから答えた。

「手下を一杯隠れさせているんだろうな」

「まあそうだろうな」

情報屋もそれはわかっているようだった。

「街のイタチって言われてる俺もわかるぜ」

「奴等は野良猫さ」

向こうのグループ名がキャッツだから言っちゃった。何でも街の何処にでも目がいくってことを言いたいらしい。俺にとっちゃ泥棒猫だが連中はそうは思っていない。

「街のな。薄汚い野良猫さ」

「で、あんた達は犬だな」

「ああ」

イタチを自称するその情報屋に答えてやった。

「狼ってところまではいかねえからな」

「そうか、犬か」

奴等のグループ名がキャッツなら俺達はドッグスだ。俺達の名前は街の何処でも嗅ぎ付けるってところからだ。こう言つとどっちもどっちって気もするが俺達にはポリシーがあるつもりだ。連中にはそれがない。それだけの違いがあるって自分達では思っていた。

「まあ犬と猫だな」

「そういうことさ、俺達は犬だ」

またこのことを言っちゃった。

「街のな。犬と猫は仲が悪いもんだ」

「そうだな。うちの犬と猫もそうだ」

「あんたの家の中だけじゃねえぜ」

イタチにまた言っちゃった。

「この街でもな。同じさ」

「そうか。で、どうするんだ？行くのか」

「勿論」

口から白い煙を出しつつ不敵に笑って答えてやった。

「行かないでどうするんだ？お犬様が泥棒猫に負けてたまるかよ」

「そうか。じゃあいいんだな」

「ああ、やってやるぜ」

答えつつ自分の右手を見る。そこにはタトゥーがある。黒犬のタ

トウーだ。俺がチームのリーダーだからあえて入れた。腕の甲のそれが笑っていた。

「絶対な。決着をつけてやる」

「そうか。それじゃあ」

「情報、有り難うな」

ここで俺は指を鳴らした。するとカウンターのマスターが愛想よく俺の前に出て来てくれた。そしてバーボンのボトルを一本俺達の前差し出してくれた。

「おごりだ。取っておきな」

「相変わらず気前がいいね」

「犬はそうなんだよ」

「冗談めかしてまた犬のことを話に出す。」

「だからだよ。遠慮なくな」

「わかったよ。じゃあ遠慮なくな」

「そうしてくれ。さて、と」

煙草を灰皿で消してそれから席を立った。カウンターにコインを置いておくのは忘れない。

「マスター」

「何だい？」

「すぐに戻って来るぜ」

不敵に笑って白髪のマスターに言ってやった。

「すぐにな。それまで店開けておいてくれよ」

「すぐにかい」

「勝った後の酒が一番美味しいんだよ」

だからだった。喧嘩の後はいつもここで飲む。このことは今回も守るつもりだしそうした。

「だからな。頼むぜ」

「わかったよ。じゃあ待ってるぜ」

「ああ、それでな」

「何人分だい？」

マスターは背を向けて店の扉に向かう俺に声をかけてきた。薄暗い店の中は他の客の煙草の煙とその匂いで一杯だった。ついでに酒の匂いもきつい。

「何人分だい？あんただけかい？」

「俺だけだったらいんだけれどな」

立ち止まってマスターに顔を向けて言った。6

「そもいかないだろうな」

「じゃあメンバー分だけ」

「ああ、頼む」

こうマスターに答えた。

「多分そうなるからな」

「わかった、それじゃあな」

「連中のことさ、どうせ潜んでいやがる」

不敵に笑いながら今度はガムを取り出した。早速それを口の中に入れる。

「こつちも用意しておくさ」

「集合かけとくんだな」

「ああ、念の為な」

「俺がかげようか？」

イタチが名乗り出てきた。

「何なら。どうだい？」

「それは情報屋の仕事越えてるだろ」

「バーボンの御礼さ」

笑ってこう返してきた。

「だからさ。それじゃあ駄目かい？」

「そこまではいいさ」

けれど俺はその申し出は断った。何もそこまでしてもらわなくても思ったからだ。幾ら何でも凶々しい。電話位は簡単にかけられる。

第二章

「俺がかけるよ」

「そうか」

「ああ。じゃあ今度こそ本当にな」

「勝って来いよ」

イタチは完全に背を向けた俺にまた声をかけてきた。

「絶対にな」

「俺が負けたことがあったか？」

俺はいつもの不敵な笑みで問い返した。

「そういうことさ」

「ああ。じゃあ待ってるぜ」

「勝手にしな」

こうやり取りをして店の黒い扉に手をかけて後にした。店を出るとまずは自分のバイクの前に来た。とりあえずそこからジャックナイフを取り出してブーツに押し込む。最後の備えてやつだ。

「まあここまでではしなくていいかな」

そうは思ったが念の為だった。キャッツの奴等とはにかく汚い。鉄パイプ位は持っていて不思議じゃない。こっちも鉄パイプは持って行くがそれでもだった。あくまで用心だ。

ニコチン臭くなったガムを溝に吐き捨てて携帯を取り出す。それから電話をかけた。

「おお、御前か」

「ああ」

早速電話をかけた仲間の一人が出て来た。長い付き合いの気心の知れた奴だ。

「今夜の一時な」

「どうしたんだ？」

「キャッツのヘッドとタイムンすることになった」

「おいおい、マジかよ」

そいつは俺の言葉を聞いてまずはいきなり笑った。

「あいつがか！？有り得ないだろ」

「御前もそう思うか」

「それで場所は何処なんだよ」

「例の倉庫の所さ」

イタチの情報をそのまま伝えた。

「港のな」

「あそこか」

「どう思う？」

真剣な言葉で尋ねた。

「これは。御前はどう思う？」

「畏だな」

警戒する声ですぐに返って来た。

「場所があ倉庫でしかも相手がキャッツだな」

「ああ」

「畏だ」

また言ってきた。

「確実に。奴等潜んでるぜ」

「やっぱりそう思うか」

「それ以外考えられないな」

またはつきりと答えてきた。

「連中だからな。一人で行くなよ」

「じゃあどうしろっていうんだ？」

「俺も行く」

ここでも真剣な言葉だった。

「他の奴等にも声をかける。それでいいか」

「全員か」

「ああ、七人全員だ」

俺達ドッグスは七人のメンバーだ。数こそ少ないがその七人が全

員核弾頭つてわけだ。だから街でも数だけはい多いキャッツの奴等と
今までタメ張つて来れた。

「それでいいな」

「そうだな。じゃあそれで頼む」

「そうしろ」

言葉がきつくなっていた。

「もう聞いたから止めてでも来るからな」

「全員か？」

「ああ、他の奴等もこう答えるに決まってるだろ」

言葉はさらに真剣なものになっていた。

「俺と同じでな」

「そうだな。じゃあそういうことだな」

「ああ、一時だな」

「そうだ」

時間が確認された。

「一時だ。それで場所はだ」

「あの倉庫だな」

「そうだ、港のな」

「他の奴には俺がかけておく」

「頼めるか？」

「おいおい、水臭いこと言うなよ」

今の言葉は笑いが入っていた。

「何年の付き合いなんだ？」

「そんな昔のことは忘れたな」

俺も言葉に笑いを入れてみせた。

「あんまりにも昔なんぞな」

「そういうことさ。じゃあな」

「ああ、一時にまたな」

「かなり楽しみだぜ」

お互いに声が緊張を含んだ笑いになっているのがわかった。

「真夜中のパーティーなんて久し振りだからな」

「そうだよな。キャッツの奴等は多分全員だね」

「面白いじゃないか」

電話の向こうからまた言ってきた。

「そついうのがな」

「そうか。じゃあ派手になると思っぜ」

「ああ、じゃあな」

ここで電話を切ってバイクに乗った。アクセルを一気に踏もうとする。そして駅前まで行くとその普段はもう誰も使っていない掲示板に書いてあった。汚ねえ字で。

『一時にあの場所だ　キャッツ』

宣戦布告って奴だ。ついでにこつも書いてあった。

『一人で来い。タイムマンで決着だ』

「へっ」

今の書き込みには口の端を歪めて笑ってやった。

「大嘘つきが。いい加減それには乗らないぜ」

こつ言ってからまたバイクを進ませた。そうしてその倉庫にまで来た。倉庫まで来ると気配だけが感じられた。あちこちから不気味な気配を感じる。

それに十字を切る。あくまでおどけてだ。おどけて十字を切るとそこで。キャッツのボスがその無意味にでかい身体を見せてきた。

「よお、来たな」

「ああ、約束の時間にはちよつと早かったか？」

「いや、丁度いいさ」

笑って応えてやる。奴の姿が満月の光で照らされてはつきりと見える。満月は俺の背中にあった。今は月の女神様が俺の守り神ってわけだ。

第三章

「いい時間だぜ。一時だ」

「そうか。遅いかって思ったんだがな」

「パーティーのはじまりだ」

奴は今度はこう言ってきた。

「手前を地獄に送るな」

「俺はタイムンで負けたことはねえんだがな」

こう答えてやった。

「無敗だよ。それはわかってるよな」

「また随分と自信家だな。相変わらずって言ってやるのか？」

「何だっけ言う方がいいさ。それでやるんだな」

「ああ。ただしだ」

奴はにやりと笑ってきた。

「一人じゃねえぜ。パーティーはよ」

「一人じゃない!？」

「そうさ、何故ならな」

満月の光に照らされてあちこちから猫共が出て来た。それぞれその手にバットやら鉄パイプやらを持っていやがる。野良猫共がやっぱり潜んでいやがった。

「ここに全員呼んだからな。キャッツのメンバーをな」

「約束が違うんじゃないかねえのか？」

わざと咎める顔と声で言ってきた。

「タイムンだったんじゃないかねえのか？」

「約束!？何だそりゃ」

予想通り俺の言葉をせせら笑ってきた。

「俺にとっちゃ約束なんて破るものなんだよ」

「随分と卑怯なことしてくれるな」

また奴を咎めて言ってきた。

「見事にはめてくれたな」

「それがキヤッツのやり方なんだよ」

全然悪びれた様子もなかった。本当に平気な顔だった。もっともこれも最初からわかっていたことだ。けれどここでは演技を続けてやった。

「知らなかったか？まあ安心しろ、殺しはしないさ」

「そうかよ」

「半殺しにするだけさ。しかしそれに負けた手前は」

「俺は？」

「終わりさ」

相変わらずせせら笑いながらの言葉だった。下卑た顔に相変わらずむかつく笑みが浮かんでいやがる。それがむかついて仕方がなかった。

「負けたチームのヘッドなんてな。それでこの街は俺のものさ」

「反吐が出るな」

奴の周りにキヤッツの者達が集まってきた。本当に全員いるって感じた。全員で俺をボコる気なのがわかる。そいつの言葉でいよいよ動く感じだった。

「じゃあよ。行くぜ」

「ふざけやがって」

「騙される方が悪いんだよ」

ここでも汚い奴だった。その笑顔がさらにむかつくものになっていた。

「じゃあよ。騙されたまま街から消えな」

「消えるのは御前の方さ」

ここで俺は言ってやった。にやりと笑って。

「手前の方なんだよ。野良猫共がな」

「何っ!？」

「おい」

右手から何かを取り出してやった。そしてそれを動かす。

「やっぱり予想通りだぜ。猫は猫だな」

「そうかよ。まあ間に合ってよかったな」

「全くだぜ」

「おい、野良猫共」

俺の後ろから次々に声がした。全部で六つの影が後ろから近付いて来るのがわかる。

「相変わらず汚ねえ真似してくれるな」

「タイムンだつて約束も破るかよ」

「つたく何処までもふざけた野郎だぜ」

「手前等……」

奴は一転ギラギラする怒り狂った目で俺を見てきた。

「何故ここにいやがるんだ」

「決まってるだろ？わかってたんだよ」

「わかってた!？」

「手前の考えることはお見通しなんだよ」

また奴に言つてやった。

「どうせこんなことだろうと思つたが予想通りだったな」

「ちっ……」

「これで全員だ」

俺の横に六人揃つた。これで七人全員だ。

「やるぜ。いいな」

「数なら負けちゃいねえ」

奴はここでも数を頼んできた。他の奴等も同じ感じた。けれど怯んでいるのがはっきりわかる。満月の光に照らされたその顔からはつきりとわかる。

「こうなりや好都合だ。こうなりやよ」

「やるつていうのかよ」

「そうだ。総力戦つてやつだ」

「そうかよ。じゃあ容赦はしねえぜ」

「おい」

ここでドッグスのメンバーの一人が俺に声をかけてきた。

「ほら、これだ」

「おう、悪いな」

鉄パイプだった。それを受け取る。

「行くぜ。数は向こうが圧倒的に多いけれどよ」

「そんなの答えは出てるだろうが」

「なあ」

けれどメンバーは皆勝てるかと疑っていなかった。これも根拠があった。

「犬は猫に負けたりしねえよ」

「勝つのは俺達だ」

「勝ったら本当にパーティーだぜ」

ここで皆に言っちゃった。

「いつもの店でな」

「ああ」

「来な」

俺は手で招いて奴等を挑発してやった。

「相手してやるぜ」

「手前、こけにしようってのかよ」

「俺達キヤッツを」

「だから言っただろ？」

余裕たっぷりの声で返してやる。

「猫はよ、犬の相手にはならねえんだよ」

「そうかよ、じゃあよ」

「ここで死ねよ」

「やるぜ」

向かって来た野良猫共を見つつ仲間達に話す。

「パーティーだ」

「ああ、やるか」

「今からな」

こうして派手な喧嘩をはじめた。それが終わってから俺達はそのバーに集まった。扉に手をかけてみるとすうっと開いた。マスターは約束を守ってくれた。

第四章

それで中に入ると。まずはマスターが笑顔で迎えてくれた。

「いらっしやい」

「ああ、やって来たぜ」

俺が笑顔でマスターに応えた。

「今終わったところだ」

「それでどうなったんだい？」

「顔見てわかるだろ」

また笑顔で言っちゃった。

「勝ったぜ。楽勝だ」

「楽勝か」

「そうさ。ちよつと怪我した位さ」

今度はこう言っちゃった。

「ちよつとだけな」

「ちよつとかい」

「向こうは何十人もいて全員ボコボコだぜ」

「その通りさ」

俺の言葉に続いて仲間達もマスターに言ってきた。七人でカウンターの席に着いてそこでまた話す。丁度そこでバーボンが入った力ツプが出された。

「俺達はそれに比べたらこの通り」

「掠り傷だけさ」

「そういえばそれ位だね」

マスターは俺達の傷を見て目を少ししばたかせた。

「見事なものだよ」

「そういつことさ。奴等全員ふらふらさ」

「そこまでやったのかい」

「ああ、舐めるなっただ」

「猫風情がな」

「じゃああれかい」

マスターは俺達の強気の言葉を聞いてまた言った。

「これでこの街はあんた達のシマになったのかい？」

「いや、それがな」

「ちよつとな」

俺達はここでもうにも苦い顔になった。そうなのはバーボンのせいだけじゃなかった。バーボンの苦さとは違った苦さのせいだ。

「奴等も存外しぶとくてな」

「全員捨て台詞置いて逃げ去りやがったよ」

「おやおや、じゃあ再戦ってわけか」

「そうなるな」

「残念だけれどな」

苦笑いと一緒にバーボンをあおってマスターに答えた。

「やれやれだよ」

「どうにもこうにも」

「そうそう上手くはいかないってことか」

「ああ、その通り」

「猫共もしぶといぜ」

本当に今度こそと思ったがこんな終わりだった。映画みたいに格好よくはいかなかった。

「また当分賑やかなのが続くぜ」

「けれどな。今度こそ」

「勝つっていうんだね」

「その通りさ。ああ、バーボン」

マスターに答えるのと同時にここでバーボンをまず飲み干しちまった。

「もう一杯な」

「おいおい、もう一杯飲んだのか」

「今日はパーティーなんだろう？だったらいいな」

「また飲むってことか」

「ああ、そうさ」

笑って答えてやった。

「勝ったんだからな」

「そうだったね。約束だったし」

「どんどんやるぜ」

「こっちとしてはやれやれだよ」

マスターはここで両手を腰にやって呆れたような笑顔を俺に向けてきた。

「これでこのパーティーも終わりかって思ったんだけれどね」

「悪いな、けれど今度こそな」

「勝つっていうのかい？」

「だから何度も言ってるだろ？」

早速出されてきたバーボンを受け取りながらマスターに答えた。

「犬が猫に負ける筈ないってな」

「そうだといいがね」

「絶対そうさ。それじゃあな」

「まあ、勝つたらまた来るんだね」

今度はバーボンのボトルをまとめて何本も俺達の前に出してきた。ついでにつまみでナッツもどかんと籠に入れてた。しかもチーズまです出してきている。

「こっちやって奢ってやるからな」

「流石だね、マスター」

「そうこなくっちゃ」

「情報役に立ったみたいだな」

店の扉の方から声が聞こえてきた。

「いや、何よりだよ」

「あんたのおかげさ」

声の方に顔を向けて不敵な声で返してやった。

「それもこれもな」
「そうかい。じゃあ俺もいいかな」
イタチだった。楽しげに笑いながら俺達のところに来る。
「入れてもらってな」
「あのバーボンはまだ手をつけてないのかよ」
「待ってたんだよ」
こう俺に返しながらカウンターに来た。
「ずっとな。あんた達が来るのをな」
「随分と律儀だな」
「俺らしいだろ」
「いや、全然」
イタチの今の言葉には首を横に振って笑ってやった。
「全くな。そうは思わないさ」
「随分と冷たいね、また」
「冷たくなんかねえさ」
ここでは笑顔になった。
「わかってるんだよ、あんたのことをな」
「そうなのかよ」
「それでだ」
イタチに対して尋ねた。
「あんたもまた忙しくなるぜ」
「ああ。キャッツの奴等は生き残ったらしいな」
「野良猫も案外しぶといぜ」
俺はバーボンをやりながら言った。
「また随分とな」
「喧嘩は当分続くってわけか」
「そういうことさ。それじゃあその時はまたな」
「ああ、頼まれてやるぜ」
「わかったらほら」
「あんたもよ」

仲間達はイタチを取り囲んできた。

「飲めよ、ほら」

「どんだんな」

「へへへ、悪いな」

「じゃあマスター」

俺がマスターにまた声をかけた。

「悪いが朝まで延長だ。それでいいな」

「ああいいさ、好きなだけやりな」

マスターが笑顔で返してくれてこれで決まりだった。俺達はそのままとことんまで飲んだ。喧嘩に勝つたらしいもこうだった。野良犬共の下らない、けれど楽しい喧嘩の後のパーティーだった。

DOGS VS CATS

完

2008・10・1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7950g/>

DOGS vs CATS

2010年10月8日15時37分発行